



尾道市文化財保護委員
尾道ユネスコ協会事務局長

写真家 村上宏治

【八朔巡り物語】 第7話

月刊柑橘誌『たちばな』その2

昭和11年11月15日創刊『たちばな』
その後31年間継続し、毎月発行されたその冊子は総計350冊
この発行にかけた、岡野周蔵氏の情熱。

岡野周蔵氏の三一年間発行し続けた「たちばな」。その刊行物の約八割を、所在確認と各方面から収集をし、全ての頁をデジタル化に向けて作業を進めています。各号の頁数は平均で三六頁。単純計算でも二二、六〇〇頁にも及びます。膨大な月日と、執筆の情熱と使命感。周蔵氏を突き動かしたのは、何んだったのか。その内容は一人の愛好家が、趣味で綴ったものではなく、全国の柑橘農家の参考書となっていました。

その月の柑橘の歳時記と風情が始まり、各界の博士、著名な研究者・大規模柑橘農家・教育機関からの寄稿など幅広く。

「たちばな」の全体構成は、その月の柑橘の歳時記と風情が始まり、次に各界の博士・著名な研究者・大規模柑橘農家・教育機関からの寄稿で学術的評価の高い内容であり、周蔵氏の執筆原稿も、統計を示し、柑橘農家としての経験もふんだんに掲載し、学

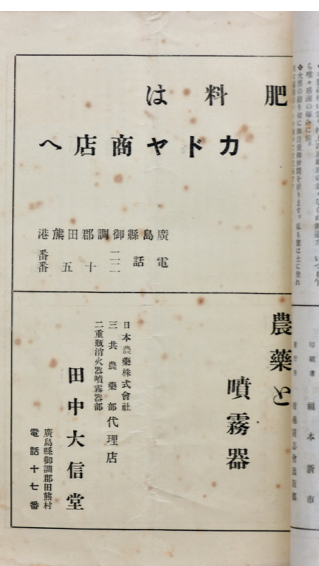
術的裏付けをもつての執筆および、編集が続いています。やがて内容は、トビックスや、CITRO CLUB(シトロとはミカン科ミカン属の常緑低木樹の事を指し、フランス語でシトロン(citron)と言った場合はレモンを指します)と名付けた気軽に語れるコーナーを設けていて、創刊号の冒頭で周蔵氏はこんな書き出しで始めます。「煎餅でもかじりながら、ゴールデンバットを燻らせながら、大いに語るべき我々の柑橘同志の倶楽部です。面白おかしく話すのもよし、屁理屈を吐き出すのもよし、調査の依頼、研究資料の無心なお結構……」後略。柑橘農家の現実感あふれる生の声を取り上げ、一つのサロンのような内容になっていきます。終盤は生活に密着した内容と繰り返し表現される、ビタミンについての効能と必要性、そして「瀬戸の小島より」と題して周蔵氏のエッセイで終わります。

先見の明があり、柑橘の発展に尽力。そしてその想いを支える地元企業の深い繋がり。

創刊当時から既に、柑橘のビタミンの有効性、柑橘を使った酒の開発、柑橘の缶詰についての商品開発について度々掲載されています。日本が戦争に向かっている時代において、視点は常に海外を意識したグローバル志向の強い内容になっています。周蔵氏自身も柑橘農家としての作業の後で、執筆依頼・自らの執筆・編集の日々が続きます。時々本文中にてペンを持ち机にて寝てしまったと綴り、そんな状態でありながらも、更に五名位を一つの単位として、月一〜二回の研究会を数か所にて開くもよし。と意欲を綴っています。

当初この書籍の発行について一方では、地方出版の壁も高かったのです。その内容の信憑性についての懐疑的意見や、一部の人による、広告料金目当ての出版としての流布だったと、それは本当に辛かったと、取材を重ね

る中でお聞きしました。信念を持つ周蔵氏の活動を、心より支援する地元因島の企業が変わらず応援し続け、三一年間という月日を過ごせたのです。創刊から廃刊まで変わらず、『たちばな』を印刷工程へと送り出す文字原稿の整理を、剪定鋏でその名を馳せる「岡恒」さんが



現在も受け継がれている歴史ある企業が『たちばな』の出版を支えています。

引き受けられ、出版における費用捻出に創刊から変わらず、「大信堂薬局」「カドヤ商店」はじめ、地元企業と地元の有志で『たちばな』は連載を続け、地道ではあるものの、全国の主要な柑橘農家の参考書であり、柑橘情報源となっていました。

創刊当時の『たちばな』

創刊当時の購読料はひと月一〇銭。半年六〇銭。一年一円でした。一円は現在の貨幣価値(日銀の指標参考)で六、〇〇〇円と計算一冊六〇〇円程度となります。

創刊十一月、その冒頭に始まる一文をご紹介します。

【十一月の柑橘園】
満目蕭條たる冬の登場となれば蜜柑もスッカリ色附いて、中旬に入れば早くも北米輸出蜜柑の採収、月末からは愈々本格的な採収期となる。

夕映の西空に茜雲漂うて海が黄金色に輝く頃は蜜柑の色も一入鮮やかに、朗らかに弾む乙女達の唄聲が爽やかな鋏の音と快い調和をつくる。

岡野周蔵氏の人となりが見え文章に、私は一度お会いしたかったと思うのです。

